植民地社会の同化と抵抗 ②

おやさと研究所教授
森　洋明　*Yomei Mori*

アンドレ・マツワ（2）

ブラザヴィル市は９つの区に分けられているが、その一つにバコンゴ（Bacongo）区がある。市の中心から南方に広がるところで、他と比べて少し高台になっている。住宅街が広がっているこの一帯では、ラリ語が広く話されている。住宅街を少し外れたところに、周辺とは少し異なり、人をあまり寄せ付けないような雰囲気が漂う一角がある。入り口の門には、アンドレ・マツワ教会のプレート（写真参照）が掲げられている。そこには、マツワの「再来」を信じる人たちが暮らしている。

1929 年 12 月、アミカル（Amicale）という黒人の友愛組織を作ったマツワは、フランス政府によって逮捕され、裁判を受けるためブラザヴィルに送還された。翌年４月、懲役３年に加え 10 年のフランスの滞在禁止の判決が言い渡され、マツワはフランス領であった現在のチャドへ送られることになる。

チャドでの収容生活は過酷だったようだ。３年の懲役期間が過ぎても釈放されることはなく、彼は体調を崩した。1935 年、病気の彼は、それでもそこを抜けだしナイジェリアとの国境地帯へ逃げる。逃避の道中では白人支配に不満を持つ黒人たちが、彼を「アフリカ解放の闘士」として讃え、進んで援助の手をさしのべていたと言われている。フランス政府は、マツワを引き渡すようにとナイジェリアの宗主国であるイギリス政府に要求したが、何の罪も犯していない人間を渡すわけにはいかないとして拒否されている。その背景には、アフリカ植民地開発を進めていくなかで、この両国は常に対立関係にあったことが影響しているのではないかと思われる。

ところが、イギリスの庇護下に身を置くこともなく、また自身の身の危険を顧みず、マツワはブラザヴィルへ戻ることを決意するのだった。ナイジェリアを離れて祖国のコンゴを目指す。コンゴへ戻る道中のあちらこちらで、アミカルの運動に賛同する人たちによって支えられたようである。中央アフリカのベルベラティ（Berbérati）という地区にはラリ族の居住区があり、そこで病気の彼に必要な治療が施された。その後一度は密告によって植民地政府当局に捕らわれるのだが、官憲の監視下でブラザヴィルへ送還される際に、再び逃げ出すことに成功するのであった。ベルベラティに戻って数週間滞在した後、密告者の目を避けて逃亡を続け、ポルトガル船に乗り込んでダカール（セネガル）に向かう。ダカールからさらにカサブランカ（モロッコ）へ移動。そこでは彼が以前に参加したリフ戦争の時の知己の援助を得て、彼が逮捕されたフランスに再び戻ることに成功するのだった。パリに戻ったマツワを見て、アミカルのメンバーたちは「英雄」の生還に歓喜した。こうしてマツワは非合法となった友愛組織の活動の再び先頭に立つのだった。

ところが、1939 年、第２次世界大戦が勃発すると、彼はなんと再びフランス軍として戦闘に加わるのであった。しかしすぐに負傷してパリに送還され、1940 年４月に病院に収容される。そして、そこで彼の身元が発覚し、三度捕らわれの身となるのであった。彼のコンゴへの送還に際しては、彼の逃亡を恐れてさまざまな策が練られたようだ。ポワント・ノワールまで船で運ばれたのちは、コンゴ・オセアン鉄道でブラザヴィルまで護送された。道中は鎖に繋がれ、彼が逮捕されたことを民衆に見せつけるようにされたようである。彼はブラザヴィルに戻され、再度植民地政府における裁判にかけられることになる。

1941 年２月８日、彼に終身刑が言い渡された。裁判に際しては、弁護士もなく、自己弁明の機会も与えられなかった。黒人友愛協会アミカルの設立以降、植民地統治に対して抵抗運動の原動力となっていた彼は、ラリ族にとっては「英雄」であり、とくにアミカルの賛同者にとっては、反植民地運動の「旗振り役」であった。したがって、植民地宗主国フランスは彼を植民地社会を脅かす「危険人物」であるとし、早くその存在を消したかったのであろう。また、見せしめとしてマツワの身柄を「引き回し」にし、彼の「悪事」を民衆に周知させようとしたのだが、結果的にそれは彼をさらに英雄視させることになった。こうしてラリ族たちの彼への思いはさらに強くなっていくのであった。

1942 年１月、彼が最初に教理問答の教師となったマヤマ（Mayama）でその波瀾万丈の生涯を終えた。43 歳だった。ただ、彼の死に関しては謎が多く、詳細は分からない。ある記録では死因は細菌性赤痢となっているが、別の記録によれば肺炎となっている。さらには、看守による暴行で亡くなったという記録もあるようだ。マツワの遺体は亡くなってすぐに埋葬されたようである。ただ後日、彼が埋葬されたと言われる場所を掘り返してみたところ、彼の遺体はそこにはなかったと言われている。彼の死にまつわるこうした情報の真偽は定かではないが、フランスとその植民地全体に関わる彼の超人的な行動、死にまつわるさまざまな言説、さらに消えた遺体などといったことが、やがて彼を神格化させ、黒人解放を謳う黒人メシア宗教に発展していくことになる。

バコンゴの住宅街の奥にある敷地内は、マツワの再来を信じて生きるそうしたコミュニティの一つである。敷地内には、祈りの場が設けられていて、祭壇（写真参照）にはマツワの写真が置かれていた。そこの代表者に話を聞くと、彼はいつも夢のなかでマツワからの「予言」を聞いているという。私がそこを訪問することも、予言者のメッセージによって何日も前から知っていたと言う。植民地社会のなかで黒人の地位の向上に奔走したマツワは、死後、白人支配から黒人を解放してくれる「ングンザ」（Ngunza: 予言者、使者）となり、「マツワニスム」という一つの宗教運動を生み出すことになったのだった。